

# 七月作品

## 月集スバル

☆今月の四人☆ (桑原正紀選)

われを怪しむ

武田 弘之 神奈川

うぐひすの鳴かぬ今年は拓かれし裏山に人の家建ち並ぶ  
カブトムシ群がり出でん夏近く木槿むくげの枝に若葉萌え立つ  
老人といふ自覚なく九十になりたるわれを怪しむわれは  
卓球のラリー八十九回を果たせず卒寿となりたり口惜し  
飛行場やめて海浜かひんひらきたるひたちなか市のはからひ樂し

戦争は悪だ

奥村 晃 作\*東京

戦争が悪の限りを引き起こす戦争ヤメサス叡智を賜え  
大死にをすべきではない白旗を掲げて生きよ生きるべきなり  
無惨、残酷これ見よがしに行われ戦争とはつまりそう言うものだ  
本当に正しい事をやっつるか胸に手当てて考えてみな

同胞をミゴロシニシテ何ガ指導者カ戦争は悪だ即ヤメルベシ

白花水木

影山 一男 千葉

下校する小学生のこゑ湧くを浴みて立ちをり白花水木  
木蓮の白とはちがふ輝きにあくがれ誘ふ白花水木  
純粹の白といふべし晩春のひかりたたふる白花水木  
少年のわが夏の日々想ひ出づプールの水面の白きがやき  
暗黒か真白か知らね死後のこと思へば寒し四月のひかり

さくらの視線

大野 英子 福岡

いつせいに羽化したやうなさくら花あなむず痒く並木道ゆく  
父の忌をいちにちすぎて憂ふる世 墓石の裏まで浄めをり  
兄はきつと忘れてしまつてゐるだらう父の忌日もわたしのことも  
花曇る墓苑の風のなかをゆくさくらのやはき視線の下を  
生き急ぐやうなる今年のさくら花紅きはまりて風に負けたり

☆

☆



森重 香代子 山口

桜はなのてら功山禪寺 夫の墓訪ひし戻りにひとり眺てをり  
おともなく降りくる花はおのづから紋様となり苔に散りぼふ  
ま日向の庭に屈みて百足ひやくそくを石もて打ちつその艶めくを  
楓かへるの芽吹きそめたる一枝を小壺に活けて安けくゐたり  
やすらかに隣るベッドに眠りゐる娘を眺めをり春の明け方

水鳥 晴子 兵庫

日影 康子 富山

京ことば抑揚の翳ふかぶかと君語るなり「光陰矢の如し」  
芽ぐみたるいちやうひと木に黒鳥の鶉はをりてしばし影置く  
うづくまり夜の闇にをり今をいま砲火は撃たむあまた命を  
大き目に悲と意宿やどしてたたかひを止めずやめずもウクライナの民  
杖つきてよろほひゆけば天上に水木は花のしろくかがよふ

高野 公彦 千葉

古屋 祥子 群馬

前略も追伸もある人生の、夜よの酒は追伸に似る  
始まりは終りを連れて旅をせり父母ふぼも吾妻あづまも(さうして我も)  
百均で百十円を払ひたりその十円を吸ふ巨おほき團  
たたかひを望まぬものがたたかふは酩酊びびし闘牛もまた戦争も  
プーチンにこれ贈りたし泉岳寺門前で売る(切腹最中)

咲く花にまた逢ひ得たり九十二歳、骨折に明日のいのちも知れず  
咲き初めて五日の後は散る花よ つづくくと見入るこれが見納め  
寒戻り咲くをためらひるし花が開花の後にはや散りいそぐ  
記念樹としてわが植多し木はどれであつたか 街路の樹とも紛れて  
しみじみと桜花と交せし歳月や 間なくその日の終焉の予知

桑原正紀 東京

小島 ゆかり 東京

つくよみを見ぬ日つづけばひもじくて月齡曆をたどりてをりぬ  
この年も望月を見ず過ぎしこと三月尺のちひさき禍根

雨なりし昨夜の立待月おもふ濡れてひと待つひともありしか  
新月が五月一日であることを知りたり旧曆卯月つきたち

「おいしい、お茶」と言つてみづから腰あげてお湯を沸かしに行く午後三時

狩野 一男 東京

木畑 紀子 京都

丸まつた背中が伸びてしまひさう柎二桜をしみじみと見上ぐ  
プーチンとゼレンスキーを思ふべしキウ断じてキエフにあらざ  
年寄りになりましたから愚かなる負戦などあへてしません  
大変な目に遭ひ四月某日は忘れられない(日)になりました  
父の木の桐に花咲くころとなり高井戸駅のホーム恋しも

宮里 信輝 神奈川

島田 暉 神奈川

腹筋と柔軟体操のアイドリングして小寒のひと日始むる

夕桜見ひとに知らえずくちづけぬ くちづけを待つ高さの花に

夢で逢ふ見知らぬひとよ わたくしの深層に住む未生の女性か

光受け食べ物つくる「光合成」みーんな魔法を使へる葉っぱ

いくつものみどりの星が美しき「一碗屋雲」枝豆ごはん

どこかとはくの街をバイクは行くことしあをい夜明けのなかで聞くとき

いくつかの街が壊れて空深く吸はれてゆきし街角のこゑ

どんな声で語ればいいか戦争を知らない子どもそのままわたしたち

ものおもふ夜半のふとんに猫がきてあらがひがたくねむりぬ深く

花さげど介護ホームのはは遠し花きはまれば亡きちち近し

白樫の陰におきたる粟、稗のむき実にスズメ一羽、二羽くる

だいぢやうぶお前もおいでチュンと呼べば皿に身を寄す親子のスズメ

にぎにぎとスズメ語きこえ十四、五羽けさはあつまるここパラダイス

つかのまのスズメの平和ヒヨが来て餌の横取り居座りながし

餌を置くは罪ふかきかな春の庭たちまち鳥のいくさばとなる

目を覚まし吾の死体に気づいたりまた眠るべし安眠の世へ

草の葉に残る一顆の露なるやわれは輝き天に溶けゆく

みぎ頬に白蝶のふと休むなりわたしは長く光る菜の花

菜の花の金の畠のかなたより衣かがやく佐保姫が来る

枯れし木のやうな両足ふんばりて老いは歩まむこの世の坂を

大松 達知\* 東京

小山 富紀子 京都

おばあちゃんでごめんさいね、そういった人のお気持ちいまはすこしわかる  
へいじつのひるまえの美術館にいるへいじつのひるまえに来るひとたちが  
機嫌わるくて無言ならそりやよしとして機嫌フツウで無言はヤメテ  
おおいなるストレスありきとほくは知らずほくの角膜が教えてくれた  
渡りを終えて疲れ果てたる鳥がいるとその鳥を食う獣いるという

田宮 朋子 新潟

清水 正子 神奈川

ひとふゆをいかに堪へけむ瑠璃<sup>るり</sup>蝶<sup>たは</sup>深雪の消えし里山を飛ぶ  
かたくりの咲く山道をちちははもはらからも知る友とあるさぬ  
みづばせう白耳頭巾かたむけて聴きをり水の音、鳥のこゑ  
海神の手下のごとく奇怪なり深海育ちの幻魚<sup>げんぎょ</sup>の貌は  
曇み皺わづかにのこる雛罌粟の花のなかなる水の細道

津 金 規 雄 神奈川

小 嶋 一 郎 佐 賀

禁忌の恋遂げし男のものがたり水辺の花によりつつ想ふ  
夜の更けに近づき来たたる皇女あり衣摺れの音さやかに聞こゆ  
遠つ世の神の嫁なりば、つしよんは齋垣<sup>いみかき</sup>を越えほとばしりたり  
年経れば夢かうつつか判<sup>わか</sup>きがたき記憶増えゆくわが世たそがれ  
出逢ひたる女人いくたりかへりみて今際の夢に頭つは誰<sup>たれ</sup>なる

耐へられぬ試練を神は与へぬと言ひし人今朝天へ召されぬ  
桃ひらく空いそいそと背の君のもとへと昇る笑顔が浮かぶ  
立ち去ればきつとくすくす咲<sup>わら</sup>ふらむこの紅しだれすこし性悪  
あでやかに桜が咲きて煽りたり花の都の感染者数  
咲くころに禍事あるがかなしとてさくらはほろりほろりと散りぬ  
あらうことかプーチン戦争始まりぬ隣国ウクライナを標的として  
戦争がヒトの本能だとしてもプーチン戦争の何故を知りたい  
プーチンの名前に # あれば首枷<sup>くわ</sup>のやうに見えなくもない  
チエーホフの「桜の園」をさながらにプーチンよ去れ何処か遠くへ  
ウクライナ国旗の青と黄の色を選びぬ歯ブラシ二本買ふとき  
眼科、歯科巡りてこの日費やしし五時間の無駄思ふ欠びて  
籠り居の老いの起ち居はこのところ策もて水を汲むほどのこと  
トラックの尻より吐きしものを浴びけふもノルマの三キロ歩く  
庭先に生えさせねば抜かれずに済みたるものを此のハコベグサ  
要らぬものないかと電話掛かり来てこの身が然うだ言へば切れたり

後 藤 美 子 北海道

風 間 博 夫 千葉

山なしし汚れ雪消え埃立つ道となりたり春光燦燦  
人柄もおほはんとごと伏し目してマスク姿が電車に並ぶ  
スマホ画面はげしく繰り返る青年の指思ひのほかにをさなし  
炊ぐこと厭ふにあらざるそのみに暮れたる今日を思ひてはかな  
数知れぬルーティンワークをこなしつつ(日常)といふ(無事)を生きをり

福 士 り か 青 森

田 中 愛 子 埼 玉

退職は寂しくあらず強がりにあらず初めて猫を飼ふ春  
お前より八十五歳も年上ぞ先に逝くなど猫を抱く父  
出勤の前にケージの鍵を閉めミヤアと鳴かれて開ける朝あさ  
膝のうへに猫を座らせ撫でてゐる父を見せたり母の写真に  
母逝きて二十七年お煮染めの手綱こんにやくきつちり結ぶ

藤 野 早 苗 福 岡

橘 芳 園 新 潟

菜園で採れたと言ひて持ちこれる大根大根そして大根  
わたくしのQOLを支へをりよき仕事する骨盤底筋  
むらぎもをぐいと持ち上げ脊椎を直ぐ立ててゐる骨盤底筋  
預かつた二重螺旋を大切に運びゆくなりわたくしは舟  
のちの世に生れるわれ似の子のためにDNAの螺旋を運ぶ

早まつて咲いてしまつた一輪の花、枝々にあまたのつぼみ  
紙ぶき季節を問はず花ぶき季節は春の花びらの舞ひ  
満開を過ぎていくにち目で数へまだ五、六分の花が咲いてる  
八割のロシア国民プーチンを支持するといふフェイクか いいえ  
「モスクワ」にミサイル当たり黒海に沈みぬロシア海軍旗艦

目覚しのじかん早めにセットして春の朝の二度寝たのしむ  
割り込んだ御仁のまへに割り込める漢あり朝のエスカレーター  
ひと月に換算すれば数万なり前期高齢者ふたりの医療費  
コーヒーで飲むことあれど三種類のかんぱうやくがわたしの支へ  
貧しくてカラス喰ひたる信濃人を歌に詠みたり斎藤史は

ウクライナの人を威してロシア国歌うたはせたとし思ふプーチン  
柘二の如「行為と智識の乖離」生きねばならぬウクライナ兵またロシア兵  
暴力をふるふ教師はゆるさるるウクライナ侵すロシア思へば  
仏説にかなふ非武装中立論時経てだれも言はなくなりぬ  
地球には最も悪しき生きもののヒトのみが言ふ死後のたましひ

水上 比呂美 東京

わが背後の窓を見てゐるその人に本当のことを言つてはならぬ  
駅までの道順書きて白紙の余白なくなり駅が書けない  
硝子戸の向かうに竹む影は誰わたしと同じブラウスを着て  
指先が芳香剤のほひして何か殺めてしまつた匂ひ  
お茶飲みに行きたかりしが誘はれずビル風強き渋谷を帰る

鈴木竹志 愛知

戦争の背後に黒き影のあり武器商人が蠢きはじむ  
ドローンもスマホも武器の役果たしもはや戦車は遺物となれり  
殷賑とふ言葉もすでに死に絶えてクイズ番組のスパイス程度  
厚底の靴にて歩む女人らは睥睨といふを知るや知らざる  
耽溺といふにあらねど若きより「ビッグコミック」読み継ぎて来し

原賀 環子 東京

コロナ下のさくらは遠くマンションの庭の夜さくら仰ぐもいちど  
さくら花―詠嘆をもて詠へるをゆるしはしまいウクライナの地  
関東もストーブを焚く日なりけり四月中旬さむき雨ふる  
一基づつ気配をもちて暮ならびけふも昼月うかぶ霊園  
ワールドが war とひびきサッチモがこのすばらしき世界に唱へる

水上 美季 東京

（あつたかゝい）はうじ茶買つて楽しさが起き出す新幹線のホームで  
三ノ宮のへにしむら珈琲店にゐて手相見と掌を見られる青年  
ほうほうと息をしてゐる桜はな息の温度で春になりゆく  
ブリケンさん撫でてみなブリケンさんに似てくるわれと高校生と  
さくらさくらけふのさくらは笑つててふりかへりつつあふぐさくらよ

松尾 祥子 東京

大好きと言はれ夜な夜なハグをする母よ縮んで小さくなつて  
こまぎれの夜の眠りに十数回過去世生きたるごとく疲労す  
五黄の寅なる子やさしき母となりふたり子に煮るクリームシチュー  
をさな子は内緒が好きで「ないしょね」とささやくこの家のあまたの耳に  
おばあさんになりて大福食べる夢うつつとなればしんみりとをり

## 聴 雨

コスモス叢書第1211編

六花書林

鈴木竹志歌集 令和4年6月刊 二五〇〇円(税別) 送料三〇〇円

著者住所 〒448-0047 愛知県刈谷市高津波町三十四〇八